



# 科学と宗教についての討論：序論？

ジョン・ポーキングホーン

(John Polkinghorne)

## 要旨

科学と神学は、互いに対して言うべきことを持っている。両者とも、ある根拠に基づいて確信されることを通して、真理を探究することに関与しているからである。その対話の重要なテーマは、たとえば、自然神学、創造、神の摂理、奇跡などである。この論説集「ファラデー論集」は、そうした対話の今日の状況の概観を要約するものである。

科学と神学の間での討論に参加する者は、相手と対決しようとするか、協調しようとするかによって、多様に異なった論法を用いる。けれども、まず序論としての最初の課題は、討論の討議事項の項目を構成する実際の問題を概観することである。

科学と論争相手となるのは、当然、神学である。神学は、宗教的経験について吟味し考える知的営みであり、それはちょうど科学が物理界について人間が調査したことを吟味し考えるのと同様だからである。科学と神学はどちらも、自分たちは真理の性質について探求していると主張するが、明らかに、両者の探求は異なったレベルで行なわれている。自然科学の研究対象は物理世界とそこに生きる生物である。科学は実験によって調べるといふ調査方法を用いて、対象物を客観的に扱う。自然は実験によるテストの対象であり、その実験は、原理的には、実験者の必要に応じて何度でもくり返すことができる。天文学（現代宇宙論）や進化生物学でさえも、物理学や遺伝学などまさに実験による科学の洞察に多くを依存して立証を行っている。科学の目的は、物事がどのように起こっているのかを正確に理解することである。科学の関心は、世界のプロセスにある。

「すべての宗教は、その宗教の源となった根源的な出来事を振り返る。」

神学の関心は、神の性質についての真理を探究することにある。神は、畏れと従順とをもって出会うべき方であり、神をもってきて実験にかけテストすることはできない。神の超人格的リアリティーとの出会いは、すべての人格的な関わり合いの例にもれず信頼に基づくべきであり、本質的に個人的で唯一



著者紹介 ジョン・ポーキングホーン博士は、大英帝国三等勲爵士、英国学士院フェロー、牧師でもあり、25年間にわたり素粒子理論物理学の研究に携わり、ケンブリッジ大学数理論物理学教授を経て、ケンブリッジ大学クイーンズ・コレッジ学長、科学と宗教国際協会 (the International Society for Science and Religion) の創立者、初代会長 (2002-2004)。*Science and Theology* (SPCK, 1998) (邦訳『自然科学とキリスト教』(教文館, 2003)) など、科学と宗教についての著書多数。

無二の性質をもつ。宗教的経験は、単に人間の操作によって引き起こすことはできない。神学は、そのようなものではなく、神が自己を開示する啓示の行為に拠るのである。ことに、すべての宗教はその源となった根源的出来事を振り返る。その出来事は、神の性質についてのその宗教の理解を形成する役割を果たすものである。宇宙の歴史との関連においては、神学の中心的目的は、物事がなぜ起こったのかという問いに取り組むことにある。創造主なる神を信じるなら、その含みとして、宇宙で起こってきた事柄の背後に神の精神と意志があると考えられることになる。

科学と神学がこのように異なった性格を持つために、これらが完全に分離した、別個の、実際同じ基準では測れない形式の言説<sup>ディスクール</sup>であると考えられる者もいる。もしその通りなら、科学と宗教との真の討論などあり得ないだろう。宗教を人間の文化的営みとして理解して敬意は払いたいが、宗教が神を知っているという認識的主張は真剣に受け取りたがらないむきの科学者たちには、このふたつの別々な言語という構図が好まれてきた。この立場を取れば、科学と神学の比較は、実際しばしば宗教に不利な見地から行なわれることになる。しばしば、科学は事実を扱うと考えられ、それに対して宗教は、単に見解に基づくものと思われるのである。これは、二重

の誤りである。

20世紀には科学哲学の分析によって、理解を求める科学の探究は、疑う余地のない実験事実と不可避の理論的予測とを問題なくつきあわせた結果などよりもはるかに微妙なものに基づいているということが明らかになった。理論と実験は、複雑に絡み合っており、興味深い科学的事実はずべて、既に解釈を経て得られた事実なのである。実際に精巧な機器によって測定された事柄を説明するためには、理論に訴えることが必要である。一方神学のほうもまた、決してただ、疑問の余地ない権威の言葉から演繹された疑問の余地無い真理の主張に拠っているわけではない。宗教が信じることには、それ自体、信じるだけのしかるべき動機があり、それが啓示に訴えるのは、神秘的に伝えられた命題の真理に訴えているというよりもむしろ、神が自己を啓示した比類無く意味の深い出来事を解釈することに関わることなのである。

科学と神学が互いに独立しているというテーゼがあまりに大雑把で説得力に欠けるということは、多くの考察によって示されている。〈どのようにして〉と、〈なぜ〉は、同時に問われうる問いであり、もし妥当な理解を得ようと思うならば、両方を問わねばならないことも多い。やかんが沸騰しているのは、ガスの炎が水を熱したからでもあり、誰かがお茶を入れたいと思っているからでもある。ふたつの問いは確かに論理的には別個で、ふたつの答えを結びつける不可避の必然は無いが、それでも、これらの答えの形には、ある程度の調和がなければならない。お茶を入れるつもりでやかんを冷蔵庫に入れるのは、あまり意味がない。

神学は、宇宙の歴史に関する科学の説明に耳を傾けて、その説明が、世界は神に創造されたという宗教の信仰とどのように結びつくかを判断しなくてはならない。完全な不整合が見出されるならば、何らかの修正が必要であろう。宗教的原理主義者たちは、この修正は常に科学の側が行なわなければならないと信じている。一方、科学的原理主義者は、宇宙を完全に理解するには、宗教は単に見当違いの不要物だと考えている。こうした極端な立場は、科学と宗教の関係を闘争と描く図柄に対応している。討論のどちらかいずれの側が完全な勝利を得なければならないとするこれは、真理の探究のふたつの形式の間にある補完的關係を認識していない、深刻にゆがんだ目標である。それよりもバランスのとれた見方は、両方の説明が互いとの関係においてきちんと評価されるに値し、そうすることによって、科学と宗教が意見を戦わせるのにふさわしい創造的な議題が提供されるのだという見方である。

科学と神学の両方共が、ポストモダン主義者の批判的主張によって、科学や神学のメタ・ナラティブは単に作り話に過ぎず、それぞれの共同体でだけ支持されているだけだと言われてきた。どちらも、自分たちの信じることの経験的動機に訴えて答え、どちらも、自分たちの業績は、いわゆる「批判的リアリズム」と表現するのが最もふさわしいと主張している。このことは、どちらも完全に包括的な知識は得ていないということの意味する。なぜなら、自然の探求は常に、新たに予期していなかった洞察を明らかにするものであるし、神の無限のリアリティーは、常に、有限な人間が把握できる限界を超えているだろうからである。

けれども、どちらも信じているのは、自分たちが真実らしく見えるもの、つまり、リアリティーの様々な様相の地図を

作ることができるということであり、その地図はすべての役に立つわけではなくとも、いくらかの目的には十分役立つだろうということである。このような、批判的リアリズムの主張をすることによって、科学と神学は、ある程度いとこ同士のような関係を示すが、そのことは、それ自体、互いの会話を助長するに十分である。

科学は、自らを非個人的なものとの出会いに制限し、物事のプロセスに関する問いにのみ答えようとし、その野心の謙虚さによって偉大な成功を勝ち得てきた。実際、科学は、目の粗い底引き網で経験を集めているようなものなのだ。科学は音楽の説明をするのに、鼓膜に与える空気の振動の衝撃に対する神経の反応、というような用語を用いる。音楽の深い神秘、時間の中での音の連続がいかにか永遠の美の領域を語るのか、ということは、完全にその理解から抜け落ちている。科学と宗教の今日の討論の一つの重要な要素は、「限界問題」——つまり、科学を行なうことから生じるが、それに答えるには科学の自己制限能力を超えている問題——の重要性を認識することである。これらの限界問題は、新しい種類の自然神学の基礎となってきた。どのような宗教も持たない者を含む科学者たち自身によって主に発達してきた自然神学である。

## 自然神学

自然神学は、理性の働きや世界についての調査など、一般的な考察から神について何かを知ろうとする試みである。その、古典的な形は、トマス・アクィナス(13世紀)やウィリアム・ペイリー(1743-1805)のような思想家による。彼らは、神の存在〈証明〉という言い方で語り、しばしば、生物の機能が非常に適確に出来ていることについて神学的説明を求めて、これを神的職人の設計によると理解した。今日の自然神学は、より謙虚な性格のものである。その目的は、有無を言わせぬ論理的説得ではなく、洞察力に富んだ理解にあり、その主張は、有神論は無神論よりも多くを説明できるということである。科学と自然神学とは、対抗ではなくむしろ補完の關係にある。自然神学は、科学的問いは科学的回答を得られるであろうということを知っている。それゆえ、新しい自然神学は、科学から生じるが科学の説明領域を超えている限界問題に向かうことに焦点を絞っている。そうしたメタ・クエスチョンのうち、特に重要となっている問いがふたつある。

「宗教的理解は、宇宙の理解可能性自体を理解可能にする」

最初の問いは、科学がなぜ、これほど深く広範な範囲で可能なのかということに関わる。もちろん、人間がなぜ日常の現象についておおよそのところを素早く理解できるのかは、生存のための進化の必要性ということで説明できるだろう。けれども、われわれが量子物理学の亜電子界や歪曲した時空連続体を理解する能力となると、これらの領域は日常生活の出来事の直接の影響からはるかに離れた体系であり、その理解には、直感的な認識に真っ向から反するような思考法が必要なので、この能力が生存上必要なために生じた幸運な副産物だとは信じがたい。しかも、世界は科学的探求に対して非常に合理的にはっきりと理解できるだけでなく、非常に合理的に美しい。実際、科学者たちは非常にしばし

ばその美しさに驚き、研究の労苦が報われたと感じるほどである。基礎物理学では、見まちがいのないほどの数学的美しさを備えた公式に表現できる理論を発見することが、実証済みの方法となっている。なぜなら、その真実らしさをわれわれに信じさせるだけの長期にわたって有効な結実をもたらす理論とは、そのような理論だけだということが認識されてきたからである。なぜ難解な科学が可能で、その成功が一見抽象的な数学の分野と密接に関わっているかは、確かに、われわれが生きている世界の性質についての、重大な問いである。科学それ自体は、自然の法則のこの深遠な性質について説明をなすことはできない。なぜなら科学は、詳細なプロセスを説明するためにこうした性質をただ説明抜きで前提された基礎として扱わざるを得ないからである。けれども、この問題をそのままにしておくことは、あたかも科学が単に幸運な偶然にすぎないようで、知的には非常に不満足に感じられる。宗教的理解は、宇宙の理解可能性自体を理解可能にする。宗教的理解では、世界の驚くべくすばらしい秩序の背後には創造主の知性がありまさにそれゆえ、世界には知性の微が溢れているからである。

その秩序は美しいだけではなく、非常に実り多いものでもある。われわれの知る宇宙は、137億年昔に、本質的には、拡張するほぼ均一のエネルギーの玉として始まった。今日の宇宙は豊かで複雑であり、その住民には聖人も科学者もいる。この事実自体、宇宙の歴史の内には科学が語れることを超えた何かが進んでいることを示唆しているのかも知れないが、その歴史の進化の過程についての科学の理解もまた、真の意味で、宇宙は最初から潜在的に、有機物を基礎とした生物に適していたことを証明している。宇宙の内どこでも生命が可能になるためには、自然の基本的法則の所与の性質は、量的に特殊な形を取る必要があった。この、基本的なパラメーターの「微調整」は、〈人類原理〉<sup>1</sup>と呼ばれる。自意識のある生物を生み出すことのできる世界は、実際、非常に特殊な宇宙である。宇宙のこの特殊性は、なぜこの世界がそのようにできているのかという、第2のメタ・クエスチョンを生じさせる。

人類に適するように宇宙が微調整されていることは、多くの科学者には衝撃的に感じられる。彼らは、特殊よりも一般を好み、われわれの世界には特に特殊なことは何もないと考えたがる傾向にある。自然神学は、人類に適した潜在性を、創造者が被造界に与えた贈り物と理解する。この洞察を斥ける者は、微調整をもう一つの信じがたく幸運な偶然と考えるか、あるいは、極めて異常な仮説を立てて、非常に異なった非常に多くの宇宙からなる広大な多元宇宙があり、われわれにはそのうち一つの宇宙しか観察できないのだが、そのわれわれの宇宙が、偶然にも有機体を基礎とする生物の進化を許す環境にある唯一の宇宙なのだ、と考えるしかない。

## 創造

創造の教義は、まず第一に、物事がいかにして始まったか、ではなく、なぜ、物事が存在するかに関わっている

。神は、宇宙の秩序の制定者でもあり、また、支え手でもある。ビッグバンの時代に劣らず、今も、宇宙の創造主なのである。ビッグバンの出来事は科学的に興味深い、神学的にはそれほど重大ではない。この理解は、創造を持続的に展開する一つのプロセスと見て、神はその中で、自然のプロセスの結果を通して、他のどのような方法を通じてと同じくらいに働いているのだ、という創造観につながる。科学と宗教の実り多い対話は、この創造理解に基づかなければならない。

「愛の贈り物は、常に、その愛の対象にしかるべき形の独立を与えるものでなければならない。」

科学はそれが宇宙のプロセスや歴史になしうる説明を通して、学際的な会話に大いに寄与しうる。その最も重要な洞察は、法則に従った(人類界の)規則性と偶発的な特殊性が相互に作用する体系内で、今までにない新たなものが出現するという進化論的概念である。星や星雲の宇宙的な進化から、地上の生物が複雑なものに進化してきたなじみの生物学的歩みまで、必然と偶然の、「混沌の寸前」(様々な段階の秩序と些少な影響に対しても反応する感受性との交錯に特徴づけられた作用の領域)での相互作用が多くのレベルで起こってきた。

1859年のチャールズ・ダーウィンの『種の起源』の出版について、思想史を歪めて描く誤った書き方がある。これが、科学と宗教の道を最終的に分かれ、両者の間の真の討論はここで終わった、というものである。歴史的真相を言えば、ダーウィンの考えはすべての科学者にただちに受け入れられたわけでもなければ、すべての神学者にただちに斥けられたわけでもない。誰もが、過去がどれほど現在と異なっていたかを受け入れ、過去の起源に照らして現在を理解する必要性を認める努力を強いられたのである。二人のキリスト教徒思想家、チャールズ・キングズレーとフレデリック・テンプルは、まもなく、進化する世界を宗教的人々がどのように考えるべきかを手際よく一言で表す表現を生み出した。彼らは言った。疑いもなく、神は、出来合いの世界を創造することもできただろうが、結局、創造主がそれよりも賢いことをなされたことが分かった。潜在していたものが現実化するよう、被造物が進化による模索を通して「自分たち自身を作つてゆく」ことを許されている豊かさを備えた世界を創造なさったのだから

。この洞察には、非常に重要な神学的考えが結びついている。これは、神と被造界との関係をどのようなものと考えべきかに関わるのである。キリスト教神学は、神の基本的な性質は愛であると信じている。そのような神はけっして、神の人形劇場にすぎないような被造界ですべての糸を操っているような宇宙的暴君であろうとは思えない。愛の贈り物は、常に、その愛の対象にしかるべき形の独立を与えるものでなければならない。20世紀神学でも最も理解を助けてくれる考えの一つは、創造の行為が、創造主が被造物に真の意味で自分たち自身になることを許し、自分たち自身を作ること許した神の自己限定の行為、神学者の言う〈ケノシス〉の行為である、という認識だった。このことの含みは、起こる事

<sup>1</sup>人類原理については、さらに、ファラデー・ペーパー3号J.C. ポーキングホーン「人類原理と、科学と宗教の論争」を参照。

柄のすべてが、神に許されたとはいえ、神の積極的な意志に沿ったものとは限らないということである。

神と世界の関係をケノシ的に理解すれば、神学がその最も困難な問題とする悪や苦難の存在についての困惑と取り組むうえで、助けとなる。被造物が自分たち自身を作る世界は偉大な善であるが、それに必ず伴う代価がある。潜在的可能性の中を無作為に探っていくなら(それが進化論で言う、「偶然」によって、ということだが)、必然的に、しばしば、絶望的な状況に陥り、袋小路に入ってしまう。地球上の生命の実り多い歴史を動かしてきた動力は遺伝子の突然変異である。しかし、生殖細胞が突然変異して新しい形の生命を生み出すとすれば、また、体細胞が悪性のものに突然変異することもありえる。癌というつらい現実には、創造主がもっと有能だったか、あるいは、もう少し冷淡でなかったなら容易に排除できたような、いわれないものではないのだ。進化論の洞察はけっして、科学と宗教の間の有益な討論を損なうものではなく、神学的思考に非常にプラスとなる影響を与えたのである。

最後に、科学はもうひとつ、世界を被造物として語る神学者が考えねばならない問題を引き起こしている。宇宙の未来についての宇宙論の究極的見通しは気が滅入るほど暗い。時間尺度は非常に長い、結局は崩壊するか、あるいは、拡大と冷却を続ける宇宙は非常に長い時間には腐敗して、すべてが宇宙の不毛さのうちに終わることになる。有機物を基礎とする生命は結局は宇宙から消えさるに違いない。神学は常に、個人のレベルでも宇宙のレベルでも、死というものを現実的に見ようとしてきた。究極的には錯覚にすぎない進化論的楽観主義に頼らず、死を超えた運命への希望をただ、世界の創造主への信頼にのみ置いている。科学と神学がかかわる討論の最近の展開のひとつは、そのような希望の首尾一貫性を模索することへの関心の高まりにある。その結果、終末論的思考がかなり発展してきている。ただ、本論ではその詳細を論じる紙面はない。<sup>2</sup>

## 神の行為

宗教を信じる者は、何か特定の助けを求めて神に祈る。神学者たちは、歴史への神の摂理的介入を語る。けれども、科学は、世界の因果関係による作用の規則性について語る。これは、信仰者が誤っており、神は世界を存続させ続ける傍観者の役割に限定されているということの意味するのだろうか。アブラハムに由来する宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)は、すべて、神がこの世界で働き、ある特定の状況には特定の結果をもたらしていると語っている。

もし科学が、宇宙を時計仕掛けのような機械的な世界と描写するのなら—多くの人々が、ニュートン物理学が暗に示しているのはそのような世界だと考えてきたが—神学は、ただ宇宙を動き出させてあとは勝手に起こるままに任せているだけの神という神観に限定されてしまうであろう。けれども、そのような機械的な描き方は常に疑問を持たれてきた。人間は常に自分たちが自動の機械仕掛けだとは信

じず、意志を持った主体的行為者としての基本的自由を持っていると考えているからである。もし、世界の未来が人間にとって開かれたものであるなら、もちろん、世界の創造主にとっても開かれたものであるに違いない。実際、21世紀の科学は、物理現象についての単なる機械的な見方の終焉を見てきた。本質的な予測不可能性(計算や計測の改善によっては克服できない不可避的な曖昧さ)が、まず最初に量子物理学の亜原子レベルにおいて明らかになり、続いて混沌理論で日常生活の現象においても明らかになった。これらの発見が示唆する事柄は哲学的討論の課題である。

因果律の性質は、形而上学の問題である。物理学に影響を受けるが、物理学だけでは判断できない。たとえば、大抵の物理学者は、量子理論の予測不可能性は、本質的な不確定性の徴だと考えているが、それに劣らぬ経験的妥当性をもつもう一つの解釈がある。予測不可能性は、データとして得られていないさらなる因子(「隠れ変数」)が分かっていることに起因する、という解釈である。これらの解釈のどちらを採るかは、有機的統一性があるか、不自然さがないか、についての判断などの形而上学レベルのメタ科学的根拠による。

「これは、未来が何か無作為のくじ引きのようなものだという意味ではない。」

予測不可能性は、未来に起こる作用について何を知ることができ何を知ることができないかに関わる性質である。われわれが知っていることと実際の事実との関係は、常に哲学では問題になる。しかし、大多数の科学者のようにリアリズムの哲学的立場を取る人々は、この両者が密接に結びついていると見るだろう。そうとなれば、本質的な予測不可能性を因果関係が未来に向けて開かれていることの徴と解釈するのは自然である。これは、未来が何か無作為のくじ引きのようなものだという意味ではない。ただ、未来をもたらす原因には、構成物の間のエネルギー交換という観点からなされる科学の常套的説明では説明しきれないものもあるということである。それに加えて考えられる要因は力の行使であり、それは、個人の人間による行使でも、神の摂理的行為の行使でもありうる。

科学と宗教の論争では、神の行為の問題をめぐる非常に活発な議論が行われてきた。弁じられてきた様々な立場の詳細にふみこまずとも言えるのは、科学は物理世界がただそれ自体で閉じていると立証してはいないということである。物理が言うべきことを完全にまじめに受け取り、それでいて人間と神の両方とも行為の力を信じることは、全く可能である。

予測不可能性の現実的解釈は、真の生成としての宇宙像に通じる。その宇宙では、未来は過去の不可避の結果ではなく、むしろ、多くの原因となる要因が未来をもたらす。自然の法則、人間の意図的行為、神の摂理など。もし、開放性の源が予測不可能な過程の曖昧さにあると理解されるとすれば、出来事は、自然がこうしたああした、人間の意図的な行為があれをした、神の摂理が第三のことをした、というように透明なやり方で分析したり、明細を示したりはできない。真の生成としての世界についての省察によって神がどのように時間と関係しているかを考え直した神学者もいる。神はあらゆる被造物と異なり、時間に束縛されない。そして、確かに、神

<sup>2</sup> cf. John Polkinghorne, *The God of Hope and the End of the World* (『希望の神と世界の週末』). London: SPCK / New Haven: Yale University Press (2002).

の性質の中には永遠に無時間の次元がある。古典的な神学は話はこれですべてであると考え、それゆえ、神を完全に時間の外にいるものとして描いた。神は、いわば、宇宙の全歴史が神の眼の前に展開されているのを「すべて一時に」見下ろしているのだ、と考えたのである。けれども、聖書の神は、展開される歴史と常に関わり続けている一人の方として描かれており、このことは、展開される実り多い世界の創造主にふさわしく思われる。

## 奇跡

奇跡の問題は、科学と宗教との対話において頻繁に浮上してくる。これは、キリスト教が非常に真剣に考えてきた問題である。なぜなら、キリスト教の神学的物語の核心には、キリストの復活、つまり、イエスが死者の中から終わりのない栄光の命に甦ったという信仰があるからである。奇跡が起こったという主張は、神が時に類のないやり方で行動すると信じるように要求し、それゆえ、自然の性質の枠内で働く創造主という概念を超えている。科学は、通常起こることが常に起こることであると想定するが、この想定を根拠にして、前例のない一回きりの出来事の可能性を排除することはできない。けれども、奇跡は神学的問題となる。なぜなら、神が何か天の魔術師であるかのように、きまぐれに神的力量を誇示するように行為すると考えることはできないからである。もし奇跡が起こるとすれば、それは、類のない状況がそれを合理的で一貫性のある可能性としていたためであり、その出来事において、神の性格の、通常明かされるよりも深い面が現れるからである。ヨハネによる福音書では、奇跡は、まさにこの啓示的意味で「しるし」と呼ばれている。

奇跡的な物事の存在は、創造の歴史において新たな領域と結び付けて考えるべきである。それはちょうど、物理界において、新たな領域の研究がまったく新たな、予期しなかった性質を明らかにすることがある(たとえば、光が波と粒子の二元性など)のと同じである。科学者は、「これは合理的だろうか」と直感的に問うことをしない。それではあたかも、合理的なものはどのような形をとるか前もって知っているかのようなことになるからである。物理現象は、そのような問いが適切であるにはあまりにもしばしば、驚くべき性質を示してきた。そこで、科学者はむしろ、「あなたがそう考えるのは、どういう理由でですか？」と問う。これは、より開かれた問いであり、証拠を求める、より強い要求である。科学と宗教の討論において奇跡に取り組む際には、同様な路線をとらなければならない。ア priori にその不可能性を前提とするのではなく、奇跡を信じる前に信じるだけの十分な動機を要請するという態度である。

## 参考文献

一般的な入門書:

Alexander, D.R. *Rebuilding the Matrix . Science and Faith in the 21st Century*, Oxford: Lion (2001).

Barbour, I.G. *When Science Meets Religion*, San Francisco: Harper San Francisco (2000). (邦訳; イアン・バーバー『科学が宗教と出会うとき—四つのモデル』藤井清久訳. 教文館(2004))

Polkinghorne, J.C. *Science and Theology*, London: SPCK (1998). (邦訳; ジョン・ポーキングホーン『自然科学とキリスト教』本多峰子訳. 教文館(2003))

Polkinghorne, J.C. *Beyond Science: the Wider Human Context*, Cambridge: CUP (1996).

## ファラデー論集(The Faraday Papers)

「ファラデー論集」はファラデー科学・宗教研究所 (Faraday Institute for Science and Religion) を出版者とする。当研究所は St Edmund's College, Cambridge, CB3 0BN, UK, に本部を置く教育と研究のための慈善団体 ([www.faraday-institute.org](http://www.faraday-institute.org)) である。また、本論文集の日本語訳は本多峰子による。「ファラデー論集」で表明された意見は各著者の意見であり、必ずしも本研究所の意見を代弁しているとは限らない。「ファラデー論集」は、科学と宗教の相互作用に関する幅広い論題に取り組んでいる。現在出版されている「ファラデー論集」のリストは [www.faraday-institute.org](http://www.faraday-institute.org) で閲覧可能であり、そこから、PDF ファイルでダウンロード出来る。

出版：2010年7月 © The Faraday Institute for Science and Religion